

社長所感（8月）

昔、白河天皇は「賀茂河の水、双六の賽、山法師、是ぞわが心にかなわぬもの」と、意のままにならないもの3つを挙げて嘆かれました。

賽の目と延暦寺の僧兵はともかくとして、これだけ科学技術が発達した現在でも、なお、水は制御できていないと思われまます。

ゲリラ豪雨による各地の洪水被害・土砂災害がある一方で、渇水のため、東京の水がめである貯水ダムでは、貯水量が例年の半分に満たず、取水制限が始まるといった具合です。

そんな水ですが、日本人は昔から上手く付き合ってきました。

高知の四万十川の沈下橋は、流線型の橋げたとそれを支えるシンプルな橋脚のみで、それ以外のものは、欄干も含めて一切ないという造りで、洪水時には、橋が水面より下に没しながら、抵抗を少なくして、水をやり過ごすというシステムとなっています。

また、首都圏を流れる荒川は、江戸時代、文字通り荒れる川で洪水時の対応が大変でしたが、人口の多い江戸で溢水すると、被害が甚大なものとなるため、江戸の上流の「見沼田んぼ」で溢水するように、河川の構造を作っていたと言われています。

その代償として、「見沼田んぼ」では、年貢が免除されていたそうです。

この話は、幕末維新の際に活躍した勝海舟が「氷川清話」の中で披露しています。

その当時、年貢は五公五民でしたので、2年に1回の洪水で収支トントン、3年に1度の洪水ですと、見沼田んぼの農民が得をする、一方洪水が連年発生すると損をするといった勘定になります。

また、川と言えば、「河童」が付き物です。

この河童をうまく活用することで、子供たちは水難事故を防いでいました。

例えば、「河童の祭り」という伝承で、川下で晴れていても、川上の山奥でどんどんという音が聞こえるときは、河童がお祭りをしているので、川に近づいて、祭りの邪魔をすることはならないというものです。

数年前のある晴れた日に、神戸の河川敷の親水公園で遊んでいた一家が、急に増水した川に飲み込まれるという事故がありましたが、これも夜半から未明にかけて上流の山間部で激しい降雨があり、どんどんという音が聞こえていたそうで、まさに「河童の祭り」で伝承が伝わっていれば、防げた事故かもしれません。

高知には、「シバテン（小天狗で、河童の異名）伝説」という面白い話が残っており、「宵のうちに帰ろうと思ったら、シバテンが出てきて『おんちゃん。相撲とろ』というので、何番も相撲を取って、気が付いたら朝になっていた。」というもので、朝帰りの言い訳の定番となっています。河童も朝帰りに言い訳に活用されてはかきませんが、見方によっては、円満な夫婦関係を維持するための1つの知恵なのかもしれません。

河童という、想像上の生き物を活用することによって、未然に水難事故や夫婦喧嘩を防止する、これも大きく考えれば、保険の1つかもしれません。